

二〇〇二年六月二三日

聖なるものであること（八六）

ヨハネの福音書一五章一節～一六節

今日も、ヨハネの福音書一五章一節～一六節に記されている、ぶどうの木とその枝のたとえを用いた、イエス・キリストの教えについてお話しします。

これまで、この教え全体を理解するための鍵となる、一節に記されている、わたしはまことのぶどうの木です。

というイエス・キリストの言葉についてお話ししました。

復習になりますが、この、

わたしはまことのぶどうの木です。

というイエス・キリストの言葉は、旧約聖書に記されている二つのことを背景として語られています。

一つは、神である主は、ご自身の契約の民であるイスラエルを、御前によい実を結ぶべき「ぶどうの木」として植えられたけれども、イスラエルの民はよい実を結ぶことがなかったということです。

イスラエルの民は、神である主が、ご自身の一方的な恵みによって、アブラハムに与えられた契約に基づいて、エジプトの奴隷の身分から贖い出されて、主の契約の民とされました。主がアブラハムに与えてくださった契約を記している創世記一七章七節には、

わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後
のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたし
があなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。

と記されています。さらに、二二章一八節には、

あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。
と記されています。

イスラエルの民は、自分たちの存在と働きをとおして、「地のすべての国々に、神である主の祝福をもたらすために、主のご臨在の御前に仕える祭司の国として召されました。そして、その祝福の中心であり源である贖い主によって成し遂げられる贖いの御業をあかしする使命を委ねられていました。その意味

で、イスラエルの民は、神である主の御手によって「ぶどうの木」として植えられたのです。

神である主の契約の祝福は、天地創造の初めから、「神のかたち」に造られている人間に豊かないのちをもたらすものでした。そのいのちは、造り主である神さまとのいのちの交わりのうちにあります。

人間は、造り主である神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまつたとき、そのいのちの交わりを失つて死の力に捕らえられてしまいました。これに対して、神である主が、贖い主をおしてご自身の民の罪の贖いを成し遂げてくださることを約束してくださいました。その贖い主によって成し遂げられる罪の贖いをおして、再び造り主である神さまとのいのちの交わりに回復されるのが、神である主がご自身の契約において約束してくださいました祝福です。

ヨハネの福音書一五章五節には、

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。

というイエス・キリストの言葉が記されています。この言葉は、私たちとイエス・キリストの間にはいのちの交わりがあることを示しています。これは、贖い主のお働きによって回復されたいのちの交わりです。

この主の祝福は人類の罪による墮落の直後に与えられましたが、歴史を通して受け継がれていきました。そして、それはアブラハムに与えられた契約のうちに示され、アブラハムの子孫たちに受け継がれていきました。この主の祝福は、すでにお話ししましたように、アブラハムの子孫を通して、「地のすべての国々」に及ぶべき祝福でした。イスラエルの民は、これを受け継いでいたので、主のご臨在の御前に立つて、主とのいのちの交わりにあずかりながら、主の贖いの恵みをあかしするように召されていたのです。

それで、イスラエルの民が、主のご臨在の御前にあつて、主とのいのちの交わりのうちに生きることが、その使命を遂行するために決定的に大切なことでした。しかし、実際には、イスラエルの民は、周囲の国々の神々を取り入れて、偶像に仕えるものになってしまいました。たとえば、ホセア書一〇章一節、二節には、

イスラエルは

多くの実を結ぶよく茂つたぶどうの木であつた。

多く実を結ぶにしたがつて、

それだけ祭壇をふやし、

その地が豊かになるにしたがって、
それだけ多くの美しい石の柱を立てた。
彼らの心は二心だ。

今、彼らはその刑罰を受けなければならない。

主は彼らの祭壇をこわし、
彼らの石の柱を砕かれる。

と記されています。これは北王国イスラエルのことを述べていますが、実質的には、南王国ユダも同じでした。

このようなことを背景にして、イエス・キリストは、
わたしはまことのぶどうの木です。

と述べておられます。

これによって、イエス・キリストは、ご自身が、まことのアブラハムの子孫として、すべての国民の祝福の源となり、まことのイスラエルとして、父なる神さまから委ねられた贖いの御業を遂行し、ご自身の民をご自身とにいのちの交わりのうちに回復してくださいさる方であることをあかししておられます。

*

もう一つの背景は、

わたしはまことのぶどうの木です。

というイエス・キリストの言葉が、「わたしは……です。」（エコー・エイミ……）という、強調の現在時制で記されていることに関わっています。この言葉の根底には、出エジプト記三章一四節に記されている、古い契約の下での神さまの自己啓示の頂点とも言うべき、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という、神さまの御名があります。

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という神さまの御名の啓示は、神さまが、「永遠に在る方」、「何ものにも依存しないでご自身で在る、独立自存で在る方」、「永遠に変わることなく在る方」であられることなどを示しています。それと同時に、この御名は、神さまが、ご自身の契約に対して真実であられ、この世界の歴史の流れの中で、この世界の有り様がどのように変わっても、神さまはご自身の契約において約束されたことを必ず成し遂げてくださるといふことを示しています。

もちろん、神さまがご自身の契約において約束してくださったことは、約束

の贖い主をおして成し遂げてくださる贖いの御業によって、「ご自身の民を
自身とのいのちの交わりに回復してくださるということ」です。

出エジプト記三章一四節、一五節の流れでは、この、

わたしは、「わたしはある。」「という者である。

として啓示された神さまの御名が、

わたしはある。

に圧縮され、さらに、「主」「主」（ヤハウエ）に圧縮されています。この「主
（ヤハウエ）は固有名詞で、契約の神である主の御名です。

イエス・キリストが言われた、

わたしはまことのぶどうの木です。

という言葉は、「わたしは……です。」「（エゴー・エイミ……）という強
調の現在時制で表わされています。これは、表現の形としては、

わたしは、「わたしはある。」「という者である。

という契約の神である主の御名の啓示のギリシャ語訳である七〇人訳の、

わたしは「（常に）在る者」である。（エゴー・エイミ・ホ・オーン）

と符合しています。

それで、イエス・キリストは、「ご自身が、

わたしは、「わたしはある。」「という者である。

という御名をもって呼ばれる方であることに基づいて、

わたしはまことのぶどうの木です。

と言われたと考えられます。

*

言うまでもないことですが、これまでお話ししてきた、これら二つの背景は、
わたしはまことのぶどうの木です。

という、イエス・キリストの言葉の背景ですから、互いに深く結び合っていま
す。

イエス・キリストは、「ご自身が、

わたしは、「わたしはある。」「という者である。

という御名をもって呼ばれる「主」（ヤハウエ）であられることに基づいて、

わたしはまことのぶどうの木です。

と言っておられます。

イエス・キリストは、「まことのぶどうの木」として、主の契約の民の地上

の「ひな型」であつたイスラエルの民があかしていたことを、すべて成し遂げてくださいました。ご自身が、約束の贖い主として来てくださり、十字架にかかつて死んでくださった。ご自身の民の罪の贖いを成し遂げてくださいました。また、死者の中からよみがえつて、ご自身の民を父なる神さまとのいのちの交わりに生きるものとして回復してくださいました。

これによつて、アブラハムに約束されていた祝福が「地のすべての国々」に及ぶようになりました。ガラテヤ人への手紙三章一三節、一四節に、

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなつて、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてのろわれたものである。」と書いてあるからです。このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによつて異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によつて約束の御霊を受けるためなのです。

と記されているとおりです。

このように、イエス・キリストが、「まことのぶどうの木」として、主の契約の民の地上の「ひな型」であつたイスラエルの民があかしていたことを、すべて成し遂げてくださったのは、イエス・キリストご自身が、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもつて呼ばれる「主」(ヤハウエ)であられるからです。

*

先週もお話ししましたように、この、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもつて呼ばれる契約の神である「主」(ヤハウエ)は、「神のたち」に造られている人間が造り主である神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまつた直後から、贖い主を約束してくださいました。そして、長い準備の時代を経て、今から二千年ほど前に、約束された贖い主が来られて、十字架の死をもつてご自身の民の罪の贖いを成し遂げてくださり、死者の中からよみがえつて、ご自身の民のために、父なる神さまとのいのちの交わりの道を開いてくださるまで、その約束を保ち続けてくださいました。

その間に——人間の側を見えますと——人間は、神さまに対する罪を増し加えて、しばしば、罪の升目を満たしてしまうほどになつて、終末的なさばきを招くに至りました。ノアの時代の全人類的な腐敗と暴虐の極まりを初めとして、バベルにおける人間の高ぶり、ソドムとゴモラにおける徹底的な腐敗、

荒野のイスラエルの度重なる不信仰、王国時代のイスラエルとユダ王国の不信仰と背教、そして、その総仕上げとも言うべき、約束の贖い主を十字架につけて殺してしまうに至ったことなどが目につきます。

そのどれを取ってみても、神である主の契約のうちに示された贖い主の約束を受け継いだ者たちを陥れようとする暗やみの力の盛んな働きかけがあったことを、感じ取らないではいられません。そのことは、言葉としては記されてはいませんが、それだけに、その働きが人間の目には隠されている巧妙なものであることを思わされます。創世記三章一五節に、

わたしは、おまえと女との間に、

また、おまえの子孫と女の子孫との間に、

敵意を置く。

彼は、おまえの頭を踏み砕き、

おまえは、彼のかかとかみつく。

と記されている「最初の福音」と呼ばれる贖い主の約束が、「蛇」の背後にいるサタンに対するさばきの言葉であること、そして、サタンについて、

おまえは、彼のかかとかみつく。

と言われていることは、人類の歴史、特に、神である主の救いの御業の歴史を通して常に真実であったのです。

また、これらの人間の側の不信仰だけでなく、ノアの時代に人類全体がさばきに服するようになったこと、エジプトの王パロがイスラエルの民に誕生する男の子をみな殺すように命じたこと、アッシリヤやバビロンの手によって北王国イスラエルと南王国ユダが滅ぼされたこと、そして、イエス・キリストがお生まれになったとき、ヘロデ大王がベツレヘム近郊の二歳以下の男の子を殺したことなどは、「女の子孫」として来られる贖い主に至る流れを根絶やしにしようとする暗やみの力の働きでもありました。

*

そのような、暗やみの力の巧妙な働きと、人間の側の不信仰と背教にもかかわらず、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる「主」(ヤハウエ)は、ご自身の契約のうちに約束してくださった贖い主をお遣わしく下さり、ご自身の民のために贖いを成し遂げてくださいました。というより、人の性質を取って来てくださって、ご自

身の民の罪を贖うために十字架にかかって死んでくださり、ご自身の民を父なる神さまとのいのちの交わりに生かしてくださいるために死者の中からよみがえってくださった、御子イエス・キリストこそが、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）であられるのです。

イエス・キリストは、人の性質をお取りになつて来られる以前から、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）として、暗やみの力の巧妙な働きかけと、ご自身の契約のうちに示された約束を受け継いだ者たちの不信仰と背教にもかかわらず、贖いの御業を成し遂げてこられました。その働きによつて、ご自身の契約のうちに約束された贖い主と、贖い主によつて贖いの御業が成し遂げられることを信じる民を起こしてください、その信仰を支えてくださり、約束を受け継がれるようにしてくださいなのです。

造り主である神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまった後の人類に、贖い主の約束を与えてくださったのは、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）です。そして、その約束を信じる民を起こしてくださいだったのも、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）です。さらに、時代を越えてその約束と約束された贖い主を信じる民を保ってくださいだったのも、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）です。

ですから、「ぶどうの木」として植えられた主の契約の民が、どこかで実を結んだことがあったとしたら、それは、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）が、一方的な恵みをもって、その民をご自身の契約の祝福のうちに保ってくださいだからに他なりません。

このことは、私たちにもそのまま当てはまります。私たちがイエス・キリス

トを信じていることができるようになったのは、イエス・キリストが、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）として、私
たちを導いてくださり、支えてくださっているからです。私たちは、不真実な
者ですが、その私たちが実を結ぶことがあるとしたら、それも、イエス・キ
リストが、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）として、私
たちを導いてくださり、支えてくださっているからです。

このように、イエス・キリストは、ご自身が、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）であられる
ということに基づいて、

わたしはまことのぶどうの木です。

と言っておられます。そして、そのことが、私たちがその「枝」として実を結
ぶことの根拠であり理由です。

ヨハネの福音書一五章五節には、

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わ
たしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びま
す。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

というイエス・キリストの教えが記されています。

すでにお話ししましたように、この、

わたしはぶどうの木です。

というイエス・キリストの言葉も、「わたしは……です。」（エコー・エイ
ミ……）という、強調の現在時制で記されています。この言葉も、イエス・
キリストが、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）であられる
ということに基づいて語られています。そして、そのことが、私たちが実を結
ぶことの根拠であり理由であることが示されています。

*

ところが、同じ一五章の二節には、

わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もつと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。

というイエス・キリストの言葉が記されています。さらに、六節には、

だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃やしてしまいます。

と記されています。

このことをどのように考えたらいいのでしょうか。

これは、すでにお話ししましたエゼキエル書一五章一〜八節に示されていますように、「ぶどうの木」は、木そのものとしては、何の使いようもないということ、「ぶどうの木」は、ぶどうの実をならせることがなければ、「ぶどうの木」としての存在の意味をなさなくなってしまうということを背景として語られたものです。

そうしますと、ご自身、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」(ヤハウエ)であられるイエス・キリストにつながる「枝」でも、実を結ばないものがあるということなのでしょう。あるいは、福音の御言葉にあかしされているイエス・キリストを、父なる神さまが遣わしてくださった贖い主であると信じて、父なる神さまとの交わりを回復していただいているのに、実を結ばない「枝」として、切り取られてしまうということがあるのでしょうか。

まず、注意したいことは、五節に記されている、

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。

というイエス・キリストの言葉です。

人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。

と訳されている言葉は、条件文のように見えますが、直訳すれば、

わたしにとどまっていて、わたしがその人にとどまっている人、そういう人は多くの実を結びます。

となります。これは、条件文ではなく、常にそうである事実を述べるものです。

そして、これは、「ぶどうの木」であられるイエス・キリストのうちにとどまっている人は、豊かな実を結ぶということを述べています。逆に言いますと、「ぶどうの木」であられるイエス・キリストのうちにとどまっている人が実を結ばないということは、あり得ないということです。このことは、これまでお話ししてきましたように、

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。

と言っておられるイエス・キリストが、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）であられるということからも理解できることです。

*

これとともに、いくつかの、イエス・キリストの言葉を見ておきたいと思えます。

ヨハネの福音書六章三五節〜四〇節には、

イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことがありません。しかし、あなたがたはわたしを見ながら信じようとしな
いと、わたしはあなたがたに言いました。父がわたしにお与えになる者は
みな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。わたしが天から下って来たのは、自分のところを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。
わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によりみが
えらせることです。事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が
みな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終
わりの日によりみがえらせます。」

と記されています。三五節に記されている、

わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、
わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことがありません。

というイエス・キリストの言葉は、やはり、「わたしは……です。」（エゴ・
エイミ……）という、強調の現在時制で記されています。

このことに基づいて、イエス・キリストは、

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

と言われましたし、

わたしが天から下って来たのは、自分のところを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。

とも言われました。

ですから、イエス・キリストを信じる者が、一人として失われることがなく、すべて父なる神さまとのいのちの交わりに生かされるようになることが、父なる神さまのみこころであり、イエス・キリストのみこころです。そして、そのみこころは、イエス・キリストの、

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもって呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）としてのお働きをおして、必ず実現します。

また、一〇章二七節〜三〇節には、

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです。

というイエス・キリストの教えが記されています。

ここでは、イエス・キリストがご自身の羊をすべて、最後まで守ってくださいることが示されています。

そして、これも、一一節に記されている、

わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。

という、「わたしは……です。」（エゴー・エイミ……）という、強調の現在時制で表わされている、イエス・キリストの言葉や、同じ形で一四節に記されている、

わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。

というイエス・キリストの言葉を受けています。

*

その一方で、ヨハネの手紙第一・二章一九節では、
彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかつたのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうだったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためなのです。

と言われています。

このことから、

わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もつと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。

というイエス・キリストの言葉は、ある意味では、イエス・キリストを信じているけれど、真の意味で、イエス・キリストに結びついていない人々のことを述べていると考えることができます。この人々は、地上にあるキリストのからだである教会に何らかの意味でかかわっている人々です。

形の上でクリスチャンとして生きて、教会に通り続けたとしても、それで、その人が「ぶどうの木」であられるイエス・キリストにつながっている「枝」であるとはかぎりません。実際に、洗礼を受けて教会の一員となり、教会の働きの責任者ともなつて熱心に奉仕をし、多くの方のお世話をした方なのに、実は、自分の罪を認めて、福音の御言葉に示されているイエス・キリストの贖いの恵みに自分を委ねたことはなかった、という方がおられます。多くの人々をイエス・キリストに導いたのに、真の意味で、イエス・キリストにつながっていないかったという方もいます。その人たちは、「恵みによつて罪を赦された罪人」としてではなく、「いい人」としてクリスチャンでした。

私たちは、神である主がご自身の契約をとおして約束してくださつた贖い主であり、実際に、人の性質を取つて来てくださつて、十字架の死をもつて私たちの罪を贖つてくださり、死者の中からよみがえつて私たちのいのちの源となつてくださったイエス・キリストを信じて、イエス・キリストのうちにとどまりたいと思います。

わたしは、「わたしはある。」という者である。

という御名をもつて呼ばれる、契約の神である「主」（ヤハウエ）であられるイエス・キリストは、私たちを最後までご自身のものとして保つてくださいます。

す。そして、私たちが父なる神さまとの交わりのうちに生かしてくださいと
もに、私たちをおして豊かな実を結んでくださいます。